



Title	スピノザのメレオロジー：「自然の一部」概念の統一 的解釈の試み
Author(s)	立花, 達也
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81952
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認した ため、全文に代えてその内容の要約を公開していま す。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文につい てをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (立 花 達 也)	
論文題名	スピノザのメレオロジー —「自然の一部」概念の統一的解釈の試み—
論文内容の要旨 本論文は、十七世紀の哲学者ベネディクトゥス・デ・スピノザの哲学におけるメレオロジーを研究したものである。メレオロジーとは、部分と全体についての学のことである。本研究では、メレオロジーという語をもっぱら広い意味で用いることにする。つまり、本論文の関心は、スピノザが部分と全体についてどのような考えをもっていたのかを明らかにすることにある。また、本論文の対象は物体にかんするメレオロジーに限定する。以下、四章から成る。 第一章では、スピノザのメレオロジーをフラットな観点から眺めるための作業を行った。部分が全体に対して概念的に優先的でなければならないという考え：部分の概念的優先性（CPP）は、スピノザがメレオロジーに対してもつ基本的なスタンスとしてひろく認められている。だがしかし、スピノザのテキストにはCPPと矛盾するように見えるテキストもあり、CPPを墨守するがゆえに不当に無視される箇所も出てくる。これに対して筆者は、『エチカ』におけるCPPの唯一の典拠である第一部定理12の証明が実際には典拠になりえないこと、その他のCPPの典拠が「実体同士の合成」という限定的な条件において考えられたものであることを示すことによって、その他の箇所でもCPPを無批判に認めることはできないのだと主張した。またその際、本来は実体の分割不可能性を示す定理12の証明が、往々にしてCPPとの矛盾を根拠に実体がいかなる部分ももたないことの証明として理解されているが、それが不当であることも示した（第1節）。実体が分割不可能であるということは、必ずしも実体が部分をもたないことを含意しない。それは、実体が実体的部分（それ自体も実体であるような部分）をもたないことを示すにすぎない（第2節）。そこから、実体がそれ以外のなんらかの部分をもちうという、スタンダードではない解釈が生まれる。筆者はこの線を追い、様態あるいは様態的に区別された部分が、必ずしも実体を抽象的にとらえたものであるとは言えず、こうした部分が知性的に認識されうる可能性があることをテキストにそくして示した（第3節、第4節）。しかし、ここではそうした実体の部分がありうるということが担保されるだけにとどまる。 第二章では、オルデンバーグに宛てた書簡32においてスピノザが展開している彼独自のメレオロジーがいかなるものであるかを明らかにした。筆者はまず、その書簡以前に二人が交わしていた対話から当の書簡でメレオロジーが展開されるに至った経緯に着目した。この書簡では、価値のヒエラルキーをつくりだすことなくすべての人間を等しく「他のものと連結し、全体と一致するもの」として示すため、われわれが「自然の一部」であることを信じる理由を提示することが試みられているのである。そして、書簡32で示されている「部分」と「全体」の定義や、「血液のなかの虫」という奇妙なたとえもすべて、この目的に資するものであるべきだと示した。この「部分」と「全体」の定義は、一般になされるような「xはyの部分である」というような部分全体関係によって考えられているのではなく、同じ水準の他のものとの関係において理解されている（第1節）。そして、彼はこの考えに基づき、われわれが「自然の一部」であるということを、つまりは「すべての物体」が互に関係しあい一つの「全宇宙」を形成しているということを、われわれに現に生じている変化を通じて思考させるための理路を築いていることを示した。その際に、変化の概念がどのように書簡32でのスピノザの論証に組み入れられているのかを詳細に示した（第2節）。 そして書簡32の終盤では、それまでの「自然の一部」論がさらに「実体という観点から」、つまりより『エチカ』に近い枠組みにおいて論じなおされているのを確認した。そこでスピノザは、人間の身体が物的「実体の一部」であり、全体と「よりいっそう緊密に合一」しているのだと説いている。だが、実体に部分を認めるようなテキストを認められない論者は、この箇所に対してさまざまな仕方で意味を弱める解釈を行う。ところがこうした対応は別の問題を生じさせるのであり、われわれは結局のところ、人間に対して二つの「自然の一部」概念が同時に用いられているという二重性をなんらかの仕方で引き受けなければならないことを示した。つまり、スピノザは一方では「全宇宙」あるいは「無限様態」の一部として、他方では「実体」の一部として、人間について語っているのであり、この二つは一方を他方へと還元できるようなものではないのである（第3節）。 第三章では、『エチカ』第四部定理4の「自然の一部」論を読解した。この定理はCPPをスピノザに帰する論者には	

無視され、スピノザに力動論を読み込みたい論者には過度に重要視されるという、特殊なテキストである。そうした状況を生み出しているのが、人間の力能は「神あるいは自然の無限なる力能の一部である」という文言である。筆者は、このテキストを孤立させることなくひろい文脈のなかに位置づけるために、この定理4の「自然の一部」論が書簡32のうちにすでに見出した第一の「自然の一部」論とのあいだに対照的な関係を有するという作業仮説を立て、それに基づいてそれらのメレオロジーを比較することを提案した。しかし、それは仮説といってもそれ自体でもっともらしい解釈である。書簡32ではわれわれに生じている変化という結果から自らが「自然の一部」であると信じることへとアポステリオリに遡る論証がなされていたが、それに対して第四部定理4では、われわれの力能が「神あるいは自然の無限なる力能」の一部であるという観点から、①われわれが「自然の一部」であることを示し、その帰結として②われわれに不可避免の変化が生じるというアプリオリな順序での論証がなされている。筆者はこの仮説のもとに、第四部定理4における上記①と②の証明を順に追っていった（第2節）。そこで明らかになったのは、古物の力能はあくまで神あるいは自然の力能「そのもの」であるのだが、その多数性と相互規定によって互いに限定しあうのであり、われわれに生じている変化もまたこの力能の発揮として位置づけられることである。こうして書簡32と第四部定理4を比較することによって筆者は、後者に見いだされる力能のメレオロジーが、前者のメレオロジーを基礎づける関係にあること、そして両者には共通点が多く見られることを示した（第3節）。

第四章では、『エチカ』第二部に挿入されているセクションである、いわゆる「物体の小論」を読解した。このセクションでは、物体が「運動と静止」（直接無限様態）によって区別されるといわれ、さらに諸部分が一定の“ratio”によって運動を共有する場合にもこの諸部分が個体として他のものから区別されるともいわれている。そしてスピノザはすべての物体を部分にもつ個体を「間接無限様態」とみなしている。つまり、われわれはここに様態的区別と無限様態の議論を見いだすことができるのである。筆者はまず、この「物体の小論」のねらいと構成を確認した（第1節）。そのうえで運動と静止のみによって区別されるという「最単純物体」についての議論（第2節）と、諸部分間の“ratio”がいかなるものであるかが争点となる個体論（第3節）を順に検討していった。その際、第三章で見出したように個物はその力能によって他のものと相互作用をすること、第二章で見出したようにスピノザ特有のメレオロジーでは部分相互の関係に焦点が当てられていることを総合し、「物体の小論」における個体論もまた、力を持つ部分同士の関係によってとらえられるべきだということを主張した。その際に、「最単純物体」の解釈と、「個体」でありかつ「間接無限様態」である「全自然」を個体概念によっていかに包摂しうるのかという問題への対応を経ることで、「物体の小論」には書簡32で論じられていた「自然の一部」論でなされていたさまざまな議論がより洗練された形で現れていることも示した（第4節）。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (立 花 達 也)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 准教授 嘉 目 道 人
	副 査 大阪大学 教授 舟 場 保 之
	副 査 大阪大学 教授 須 藤 訓 任
	副 査 大阪大学 名誉教授 上 野 修
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： スピノザのメレオロジー —「自然の一部」概念の統一的解釈の試み—

学位申請者 立花 達也

論文審査担当者

主査 大阪大学准教授 嘉 目 道 人

副査 大阪大学教授 舟 場 保 之

副査 大阪大学教授 須 藤 訓 任

副査 大阪大学名誉教授 上 野 修

【論文内容の要旨】

本論文は、17 世紀の哲学者ベネディクトゥス・デ・スピノザの哲学におけるメレオロジーを研究したものである。メレオロジーとは、部分と全体についての学のことである。スピノザは、主著『エチカ』のほか、オルデンバーク宛書簡（書簡 32）においても、思考実験を交えつつ自説を述べている。しかし、同書簡での部分・全体論は『エチカ』とは相容れない印象を与えるものであり、結果として同書簡は、局所的に参照されるにとどまってきた。本論文は、書簡 32 の内容を統一的に、かつ『エチカ』と整合的に理解できる哲学的テキストと位置づけ、スピノザのメレオロジーの全体像を描出することを試みるものである。本論文は、序文と 4 章と結論から成り、A4 判 149 頁、400 字詰原稿用紙換算で約 545 枚相当の分量である。

第 1 章では、「部分の（全体に対する）概念的優先性」（CPP）が論じられる。これは「実体（神）の分割不可能性」と並んでスピノザ自身の基本的な立場とされてきたが、スピノザのテキストには CPP と矛盾するように見えるものもあり、解釈を難しくしていた。本論文は、CPP のテキスト上の典拠とされてきた箇所が実際には典拠になりえないことを説得的に論じるとともに、「実体」が分割不可能であるにもかかわらず「部分」をもちうるとする新解釈の可能性を示唆する。第 2 章では、書簡 32 におけるメレオロジーが解明される。スピノザは、われわれが「自然の一部」であると信じる理由を提示するために、「血液のなかの虫」という奇妙なたとえとともに部分・全体論を展開している。ところがこの箇所は CPP とは整合的でないため、CPP 論者は、二つの「自然の一部」概念が用いられているという曖昧な解釈を取らざるを得ない。本論文が提示する新解釈は、そのような曖昧性を排した統一的解釈である。第 3 章では、『エチカ』においても特に問題含みで論争の絶えない「自然の一部」論が読み解かれる。本論文は、この箇所での「自然の一部」論が書簡 32 の「自然の一部」論とのあいだに対照的な関係を有するという新解釈を提示する。すなわち、書簡 32 では、「実体の様態」としての「われわれに生じている変化」（結果）から、「自らが「自然の一部」であること」（原因）へと遡る「アポステリオリな論証」がなされている。一方、『エチカ』では「われわれの力能が「神あるいは自然の無限なる力能」の一部であること」（原因）から、「自然の一部」であるわれわれに不可避の変化が生じること」（結果）へと進む「アプリオリな論証」がなされている、

というのである。さらに、『エチカ』の「最単純物体」論と「個体」論の読解を通じて、「力能」のメレオロジーが「物体」のメレオロジーを基礎づけるという関係になっていることを論じ、本論文の解釈を補強している。

以上のような議論を経て、本論文は、従来のスピノザ研究における「部分」概念は改訂されなければならない、と結論付ける。この結論は、「自然の一部」であるわれわれ人間のあり方そのものをスピノザがどのように考えていたのか、という、より大きな問題へと波及してゆくことが予期されるものである。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、従来のスピノザ研究における論争の種であった「自然の一部」論にかんして、『エチカ』と不整合であるように見える書簡 32 を軽視する主流の解釈を退け、メレオロジーを軸に据えることによって両テキストを統一的に解釈する可能性を示す、斬新かつ野心的な試みである。

本論文についてまず特筆すべき点は、テキストをあくまで厳密に字義どおりに読むことに徹し、独自の解釈を確立していることである。その上で、フランス語圏の古典から英語圏の最新研究まで、非常に広範囲にわたって先行研究を渉猟・吟味しているが、決して特定の権威ある定説や二次文献に依拠することなく、自身の見解と対比しつつ正面から批判的に論じる姿勢を堅持している。その論証は論理的でありながら、つねに同時に原典上の典拠を明示する緻密なものになっており、きわめて説得的である。また文体も洗練されており明快である。

内容に関して言えば、二つの「自然の一部」概念を、「力能のメレオロジー」と「様態のメレオロジー」の総合として解明したことは、本論文の成果の中でも特に重要なものである。従来のスピノザ研究においてこれらは各論的に論じられてきたが、今回初めて統一的な解釈を提示したことは、当該分野を新たな局面へともたらす大きな貢献である。また、「能産的自然」と「所産的自然」の二世界論を退ける意図のもとに、神の「力能」の存在一元論をメレオロジーという切り口によって鮮やかに提示している点も、評価に値する。さらに、本論文は「様態」のメレオロジーに関して二つの新たな論点を提出している。一つは「触発関係」と「構成関係」の同一性を、「個体化」の理論ではなくメレオロジーによって論証したことであり、新規性に富む。もう一つは、「個体」の定義を、外部からの圧力ではなく内部関係（諸部分の間の構成としての触発関係）によって行ったことである。この「内部関係説」は独創的な学説である。

一方で、本論文にはいくつかの難点も見受けられる。とりわけ、書簡 32 における「アポステリオリな論証」解釈については議論を尽くせていない印象である。この点に関しては、「それは論証と呼べるものなのか」、「もし論証と呼べるとして、妥当な論証なのか」、「アブリオリな論証との関係はどうなっているのか」など、多くの疑問が予見できるにもかかわらず、それに対する応答が十分に用意されているとはいえない。また、「血液のなかの虫」という例について、その虫が「外部」の存在を推論できるという解釈を提示しているが、この箇所での議論は全体的にやや結論が先行している感があり、他の箇所と比べて強引さが目立つ。さらなる精緻化が望まれるところである。さらに、原典には現れない「実体の部分」という独自の表現が多用されており、それは筆者のスピノザ解釈からの帰結であることが示唆されているが、本論文においてこの表現を使用することの必然性については首を傾げざるを得ない。

以上のように、本論文にはなお不十分な点が散見される。とはいえ、これらは必ずしも本論文がスピノザ研究の分野において達成した画期的な成果を損なうものではない。いずれも将来的には解消され得ると見込まれる欠点であり、むしろ今後に向けた課題を示していると言える。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。